

平成25年 石川町自由民権史跡めぐり 資料



見学コース

集合 石川自治センター広場 — (車で移動) 石陽社記念碑 — 元旅館吉見屋 —
13:00 13:15~13:30 13:45~14:00
鈴木荘右衛門及び重謙屋敷、石川会所 — 鈴木荘右衛門・重謙墓地(華蔵寺) —
14:10~14:20 14:30~14:40
鈴木秀助居宅跡 — 溝井幸七居宅跡 — 吉田光一居宅跡 — 自由民権運動百年記念碑(役
15:00~15:10 15:20~15:30 15:40~15:50 16:00~16:10 場前広場) — 石川自治
センター解散
16:20
見学コースの中で、添田治兵衛・一二居宅跡、鹿岡修平居宅跡、諸岡直蔵居宅跡、溝井周之助
居宅跡、鈴木嘉平の墓も見学できる。

案内者 有賀 究(会員)、溝井恵介(会員)、吉田英高(会員)、渡辺実(会員)

平成25年12月1日

石陽社顕彰会

所在 石川町字関根 1 6 番地

石陽社 記念碑

昭和43年（1968）10月、明治百年を記念して、石川町によって「自由民権発祥の地、石陽社記念碑」が建立されました。

町の中心市街地を見下ろす、東の小高い石尊山の自然石に刻まれ、永遠に自由民権運動に参加した先人の事績を讃え、郷土の発展を見つめています。

明治百年にあたって、改めて、自由民権運動の発祥の地であることを宣言し、その象徴であった「石陽社記念碑」を刻んでいます。



そして、碑文は「郷土発展の覚悟を新たにする機縁としよう」と結んでいます。石尊山に建つ石陽社記念碑 今も正に、先人の事績を学び、後世に継承し、町の宝として、町発展の礎としていかなければならないと思います。

その後、明治8年に設立したのは河野広中を中心に、吉田光一や鈴木嘉平、鈴木荘右衛門らによる

「有志会議」であり、これが発展し、明治11年に「石陽社」と改称されたことが分かりました。

石陽社員で名前が明らかになっている社員数は207名です。しかし、石陽社も同13年には解社し、国会開設の運動は、その後設立する自由党に引き継がれていきます。

又、当地方には同時期石陽社の外に、もう一つの政治結社「第二嚶鳴社」が設立され、石陽社と競合、そして、連携しながら、活動していたことが明らかになっています。

そして、現在、再び、自由民権運動を顕彰し、後世に引き継いでいこうという動きが起き始めています。県内でも。石川の「石陽社顕彰会」の結成、二本松市の「平島松尾顕彰会」、三春地方の「三春地方自由民権運動血縁の会」、会津地方の「自由民権運動会津遺族会」の再開、喜多方市の「福島・喜多方事件130周年記念集会及び加波山事件学習会」の開催、「福島自由民権大学」の活動、さらに、千葉県における「房総自由民権資料館」の建設など、全国各地で顕彰の動きが広がっています。



石陽社記念碑碑文

記念碑文

わが郷土 石川のこの山 この川は悠
久の昔から 永遠の未来につながる祖
先の遺産である

明治八年この地に 近代日本の夜明
けを告げる 「石陽社」 が誕生した
この山間に西の立志社と相呼応して
自由民権の理想を 高く掲げた先人の
明断をたたえ 今改めて往時を回想し
その業績を偲び ここに 銘を刻んで
さらに郷土発展の覚悟を新たにす機
縁としよう

小豆畑治撰
安藤松男書

元旅館吉見屋

河野広中・広体居住跡

所在 石川町字南町59番地

吉見屋は江戸時代から旅館業を営み、明治になってからも、石川と行き来する旅人の宿となっています。

久野家に現在残されている宿泊人名簿は、明治27年

4月より28年3月、35年11月です。

元旅館吉見屋（一部が取り壊されている）

41年4月を見ると、教員、町長や村長、炭商、金物商、木挽職、大工、洋ランプ商、下駄商、煙草商、売薬、材木商、袋物商、馬商、蚕種商、書籍商などの職業、遠くは奈良県、滋賀県、新潟県、東京、宮城県、兵庫県と多岐の職業、それも全国から来て、宿泊しています。

宿泊者名簿は、町役場職員が検査を行い、その記録が残されており、その記録が残されており、宿泊者数の集計もされています。明治27年4月から翌年3月までの1年間の記録を見ると、1523人が宿泊していると記載されています。

また、河野広中や秘書の近藤徳次、河野広体、白河町長丸野実行なども宿泊しています。

長藏は明治11年に、酒類小売業の営業が県権令から許可されています。





元旅館吉見屋別邸

河野広中、広体居住跡

吉見屋の久野長蔵は、石陽社社員や自由党員になっていたかは不明ですが、河野広中が石川会所の役人として赴任してきたときに、吉見屋の屋敷内にあった住宅に河野一家を住まわせていました。広中の甥、広体もここに住んでいました。

広中は、ここから石川会所であった荒町の鈴木莊右衛門主屋に勤務しました。又、広体はここから石川小学校に通学していました。

長蔵は、石陽社員、後に第二嚶鳴社員となって活躍した添田治兵衛家から養子となって、久野家に入った人ですので、当時の政治の動きと無縁にはいらなかったと考えられます。

河野広中・広体の活動

広中は、石陽社の社長となり、県内政治結社の連携、東北の政治結社の連携に奔走します。さらに全国組織の愛国社に参加し、国会開設運動に奔走します。福島県議会議長となり、県令

三島と対峙し、「議案毎号否決」を行います。

石川区

長時代の広中 加波山事件の頃の広体 明治15年に福島・喜多方事件が起きると逮捕され、東京法院で軽禁固7年に処され、監獄につながれます。

明治22年出獄すると第1回衆議院選挙に出馬し、当選して以来連続14回当選を果たします。この間、衆議院議長、農商務大臣を歴任します。

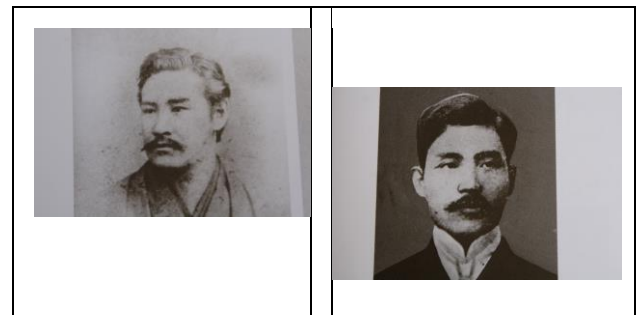
広体は明治12年、15歳で高知に立志社に遊学し、立志学舎で西欧思想を学んでいます。17年に茨城県加波山で青年たちが蜂起し、極刑に処せられた「加波山事件」では、広体はその中心人物でした。加波山事件は福島県、栃木県、茨城県の急進は青年たちが三島県令と宇都宮県庁爆破を計画し、爆裂弾を抱えての蜂起であった。しかし、全員が捕らえられ、死刑7名、無期徒刑7名、有期徒刑4名と厳しいものであり、広体は未成年ため、無期徒刑となった。そして、広中も広体も、晩年まで石川と縁が切れることはなく、交流が続きました。

石川会所・演説会場

民権家鈴木莊右衛門・重謙居宅

所在 石川町字下泉163番地の1

鈴木家は、江戸時代なかばに石川16か村の大庄屋となり、高田村、下泉村の庄屋も一族が務めていました。享和元年(1801)の鈴木茂市郎は郷土の身分です。



明治元年12月の打ち壊しでは、一族の高田町庄屋慎平成25年度に復元される門之助と下泉町庄屋謙次も打ち壊しにあっています。

鈴木家住宅は平成7年5月20日、町指定有形文化財に指定されています。主屋と門は江戸時代の歴史を知る上で貴重なものであり、さらに、自由民権運動で活躍した鈴木荘右衛門・重謙親子の居宅であることで指定されています。

加えて、明治7年磐前県の第18区を統括する石川会所

(区会所)が鈴木家に置かれています。

15年10月に荒町に新築された石川郡役所に事務所移転するにあたっての郡連合会議案によって、それまでの石

川会所が鈴木家に置かれたことが明らかになりました。平成23年12月3日案内石柱除幕式

河野広中が「磐州傳」のなかで「福島県大書記官中条政恒が視察のため石川を訪れたのは、区役所時代であり、区役所は鈴木荘右衛門の家で、正面には区長の席・・・」と記しています。区会所の事務所現存するのはめずらしく、貴重です。又、明治25年に結成された石川民会事務所に自宅を貸しています。



(石川史談22号所収「鈴木重謙家建造物の歴史的価値」より)

石陽社員荘右

衛門と自由党員重謙の活躍

荘右衛門は天保13年(1842)の生まれです。

江戸時代の大庄屋、磐前県、福島県の副区長を務め、自宅を石川地方の行政府「石川会所」に貸していました。

明治11年に有志会議から石陽社に改称され荘右衛門は吉田光一や鈴木嘉平らと幹部として活躍しました。

さらに、明治12年に郡役所ができると、郡書記に登用されます。大正5年 河野と重謙、玉川の支持者たち 重謙は安政5年(1858)の生まれで、長沼村の豪農矢部家から鈴木荘右衛門の養子になります。石陽社が解社し、明治14年に自由党ができると、養父荘右衛門の活動の姿が見えなくなり、替わって、重謙が石川郡自由党の中心メンバーとして活躍します。

自宅長屋でも度々演説会が開催されていますし、重謙も各地の演説会の弁士として登場します。諸岡直蔵宅での演説会では、弁士中止を受け、官吏侮辱罪で石川警察署に拘引されています。

又、福島・喜多方事件では拘引され、若松に護送されますが、無罪免訴となります。さらに、加波山事件でも須賀川警察署に引致され取り調べを受けています。

一方、石川村の戸長、議長、石川村外4ヶ村戸長となり、行政の分野でも活動しています。明治23年には県議会議員に当選、39年には石川町長に就任し、私立石川中学校と石川実科女学校の設立に奔走しています。

尚、荘右衛門は明治28年、吉田光一の後を継いで、2代目石川町長に就任します。

たびたび演説会場となる鈴木家長屋

政府は国会開設運動の盛り上がりの中で、明治14年に10年後に国会開設を国民に約束します。これによって政党が結成され、石川でも自由党を結成し、15年には盛んに演説会が開催されます。荘右衛門長屋では5月

1日と8日に開催されています。

歴代が眠る鈴木家墓地（華蔵寺）

所在 石川町字下泉243



近

世の鈴木家

鈴

木家以前の庄屋については、丹内太郎右衛門の存在が知られ、元和2年（1616）3月の文書に「名主」としてその名が記されています。

その

子孫と見られる丹内八右衛門は、元禄5年には石川組の大庄屋であり、享保17年まで大庄屋として確認できます。

鈴木家「家系図」によれば、当主重俊は享保19年に「下泉町庄屋役」を申しつけられているので、そのころ鈴木荘右衛門と重謙墓地（左が重謙、右が荘右衛門）庄屋の交代があったと思われます。

鈴木家は庄屋以前から財力を蓄えていたらしく、乗蓮寺の梵鐘寄進や越後高田藩奥州分領の責任者が鈴木宅を陣屋として、領内庄屋や組頭に最初の申し渡しを行っています。

宝暦3年4月と同7年9月には鈴木荘右衛門は大庄屋であり、鈴木家は幕末に至るまで石川組大庄

屋を務めています。（石川史談 22 号所収

「鈴木重謙家建造物の歴史的価値」小豆畑毅）

鈴木家の墓地

石川町字下泉にある臨済宗妙心寺派、高巖山華藏寺の墓地の中段に、鈴木家一族の墓域が大きく広がっています。

近世の五輪塔をはじめ、多くの墓石が並んでおり、鈴木家の反映ぶりをうかがい知ることができます。

この中に、民権家として活躍した鈴木荘右衛門と重謙の墓石が並んで建っています。荘右衛門は明治

23 年 1 月に 59 歳で、重謙は昭和

4 年 4 月に 72 歳で死亡しています。重治（鈴木家の祖）より 20 代俗称鈴木庄右衛門と記されています。

一段後の列に荘右衛門の父、鈴木謙次と有志会議の中心メンバーであり、鈴木嘉平も並んで建っています。鈴木謙次と鈴木嘉平の墓地謙次は明治 9 年 3 月 27 日 54 歳で、嘉平は明治 15 年 9 月 28 日 50 歳で死亡しています。

少し離れたところに、嘉平の父であり、高田町の庄屋を務めた鈴木慎之助重與の大きな墓石が建っています。書の門人たち 25 名によって建てられたものです。

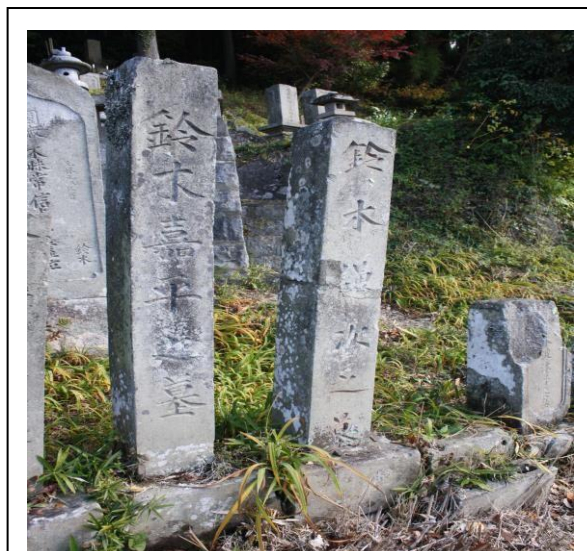
又、共に自由民権運動に参加し、福島・喜多方事件で逮捕され、若松軽罪裁判所に送致された溝井周之助、石陽社員であつ

た鈴木秀助も同じ墓地に眠っています。

鈴木慎之助の墓碑

石陽社員 鈴木秀助

所在：石川町字下泉 169 番地





現在の鈴木家住宅

秀助（２代目）は文化１４年（１８１７）生まれで、明治１１年石陽社が設立した時の社員でしたが、この時には６１歳になっていました。

明治9年1月の「石川村用掛他総代選挙承認願」によれば、秀助は什長として署名捺印をしています。村民が総代3名を選出した石川会所への報告書です。同じく石陽社員となる諸岡直蔵や小豆畑健吉も用掛のもとで什長を務めています。

なお、秀助の名は、代々世襲され、その後も秀助を世襲しています。

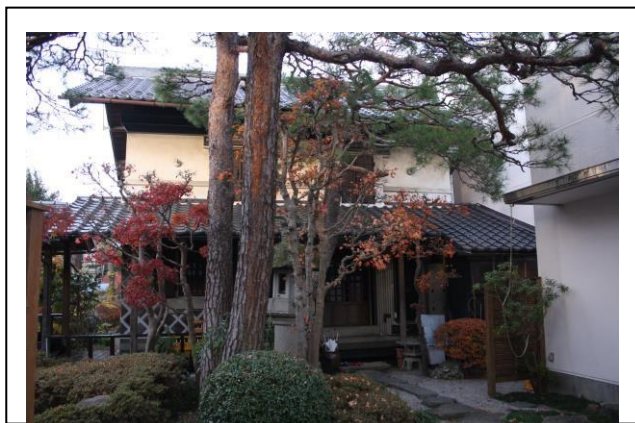
その後の秀助の活動をしめす資料は見つかっておらず、どのように活動したかは不明です。

4代目秀助（駒吉）は大正2年、諸岡銀作（呉服商）、西牧儀助（新町）らが協力し合って、当地方で盛んであった養蚕から、本格的な製糸工場「東光社」（現在石川自治センター）を設立しました。初代社長は鈴木駒吉でした。

女工など働き手は50人から100人いたと思われます。

鈴木家に残されている明治40年の「青柳製糸所生繭買入帳」から、東光社以前から鈴木家は製糸所を営んでいたことが分かります。生繭も当地方に限らず、鮫川などからも買入をしていることが分

かります。



3代目秀助が建てたといわれている倉



「大正14年石川町真景」から東光社部分

石陽社員 溝井幸七

所在：石川町字下泉 27 番

地

幸七は嘉永 3 年（1850）1 月下泉村馬場町に生まれました。溝井幸七家は嘉永 2 年、本家の溝井家から分家したといわれています。

屋号「あさかわや」として、現在まで商業をつづけています。

幸七は明治 11 年石陽社が設立したときに、社員となって、河野広中や吉田光一と共に活動しています。

同年 5 月、石陽社が吉田光一を東京に派遣する。石陽社からの幹事辞令書る時の「委任状」には、石陽社を代表し、先頭に署名し、鈴木嘉平、鈴木荘右衛門、酒井成師が続いて署名しています。石陽社の幹部の一人でした。

最近、溝井家から見つかった石陽社の辞令書によれば、幸七は幹事として活躍していました。明治 11 年 8 月 22 日付けの辞令書で、「第 1 組幹事に選挙候事 石陽社印」となっています。石陽社々則第 8 条で、会議は大会議と小会議とし、大会議は年 2 回本社で開催、小会議は年 2 回各組に置いて開催。そして、第 12 条で各組小会議議案は本社より送付、又は社員の建議するものとし、小会議の議決は 3 日間を期し本社に送付すると。

石陽社は下部に組を配置し、本社の大会議と各組の小会議を有機的に結合していたようです。

また、吉田光一文書に残されている溝井某から幹事鈴木に納入された「石陽社社金 37 人分覚」の溝井は幸七であろう。

明治 14 年に石陽社が解社し、自由党が結成され

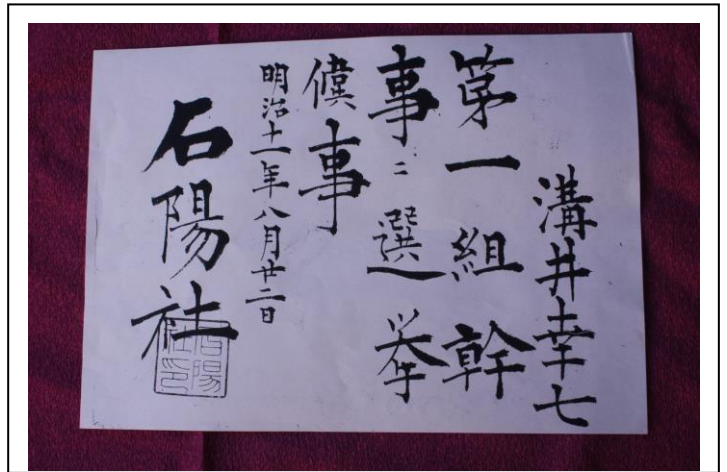
石川でも演説会等が活発になっていきますが、幸七の活動を示す資料が見つからない。

現在のあさかわや

しかし、明治 17 年に吉田光一が官吏侮辱罪で福島監獄つながら、仮釈放の保釈金工面の時、幸七は

溝井幸七石川村々会議員

1 円を寄付し、同志の窮地を助けています。



郡連合村会議員を歴任

明治19年2月3日付の石川村他4ヶ村戸長石川村会の開催通知には石川村会々議員溝井幸七、添田治兵衛、和気源吉、西牧栄吉、遠藤重朝が招集されています。

又20年3月5日。字大室に建設された郡議事堂に関する石川村外4ヶ村戸長役場と石川郡の約定書には郡連合村会議員溝井幸七として、署名しています。

大正6年、68歳で死亡しています。

昭和初期の

溝井家

自由民権運動のリーダー吉田光一

・・・神官・政治・産業振興で活躍・・・

所在：石川町字下泉150番地

光一は弘化2年（1845）9月、代々神官の吉田家に生まれた。神官に従事していたが病気になったときに、「民約論」を読み政治に志を持ったようです。

明治7年、三春から石川会所の区長として赴任してきた河野広中は、光一ら地元有志と東北最初の政治結 現在の吉田家社「有志会議」（後に石陽社と改称）を設立します。

光一は幹部として精力的に活動します。他政治結社との連携の交渉、国会開設の冬の奥羽遊説、愛国社東京支社勤務等々です。

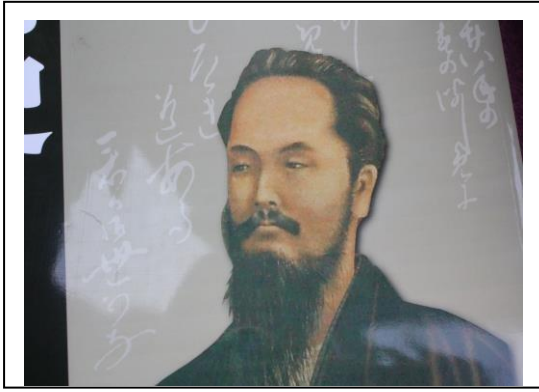
14年に県議会議員なり、河野儀長のもと、反動的な県令三島通庸と対峙し、遂に、「毎号議案否決」を可決します。

同12月に自由党福島部が結成されると、光一は党務委員になります。石川村の自由黨員は51人と報告されています。

吉田光一が建てた居宅 明治15年に福島・喜多方事件が起きますと、光一は石川警察署に逮捕、若松の護送され、そして、国事犯として、東京に送られるが、同16年無罪放免となります。しかし、これを不服として三島県令は、官吏侮辱罪で逮捕しようと白河で待ち伏せています。これを察知した光一は逃走、2年近く逃亡生活をするが自宅に戻ったところを逮捕。再び、福島監獄つながれ、19年3月3日に晴れて出所します。

同10月の県議会選挙に出馬し、当選。一方、20年には石川郡蚕糸業組合組長、郡産馬組合組長、県官有地払い下げ請願協議会長などを歴任し、産業振興に尽力します。光一が最も力を注いだのは教育で、22年石川村長になると、石川義塾（現学法石川高校）を創立し、自らが塾主となります。27年初代の石川町長に就任し、これからという28年に51歳で死去しました。町は町葬により、その功績を讃えました。





石川義塾の創立と光一

石陽社に付属して石陽館という青年教育機関が置かれたことが、「石陽館仮規則」などで何うことができます。しかし、設置や活動内容を示す資料が未見ですが、次の福島民報新聞記事がその一端を伝えています。

「石川義塾は明治11・12年頃、時の区長河野広中氏が創設し、今の有力者阿部好貞、松浦勇弥、神尾八郎等は皆ここで育成され、故吉田光一氏雅楽寺に熱心で業を継ぎ、去る26年中吉田光一の肖像画 再興して石

川義塾の名称を付した」 (明治30年3月11日版より) 光一の目に適ったのは、17歳年下で、当時石川郡立高等小学校訓導兼石川尋常小学校訓導で活躍していた森義種であつ 吉田光一の墓地 た。石川義塾の設立時は塾主光一、塾長森義種31歳であった。

吉田家住宅の後の南向き急斜面中腹に、 当時の町村は尋常小学校の経営さえ困難な財政難であった大きな自然石に光一と夫人隅子と2人の が、光一は草履履きで友人、知人を訪ねての寄付を募ったと伝

墓碑が建てられています。西牧繁次郎外2 えられています。

1名の有志によって建てられています。 寄付は37名から633円65銭という大金であった。森も 独自に知人を尋ね募金をしています。(石川町史第6巻より)

州河野広中翁顕彰碑

所在：石川町字下泉153番地の2（石川町役場敷地）



石川町もこの趣旨に賛同し、実行委員会を結成し、多くの有志から寄せられた浄財と多くの協力者により、顕彰碑が建立されました。

A large, dark, textured stone monument. In the center is a circular relief sculpture of a man with a full beard and mustache, wearing traditional Chinese clothing. To the right of the sculpture is a small, dark rectangular plaque with white Chinese characters. The background shows some greenery and a building.

磐州河野広中翁顕彰碑文

磐州河野広中翁は、嘉永二年、三春藩士に生まる。明治七年常葉戸長から磐前県石川区長となる。時に若干二十五歳であった。

明治八年八月十六日、自由民権運動に志をおく鈴木
莊右衛門、吉田光一らと力を合わせ、東北地方初の政
治結社「石陽社」を創設した。

民衆の政治参加は、ここに始まり西の板垣、東の河野といわれ、自由民権運動の先駆者として活躍した。

翁は、明治十一年一月、県の民会掛となるまで石川の町に在り、多くの同志親友に恵まれ、第二の故郷としてたいへんな愛着をもたれた。のちに衆議院議長、農商務大臣に就任、国政の枢機に参加した。

ここに先人の闘魂を敬慕し、偉大な政治家として顕彰する。

昭和五十六年十二月

有賀博撰

特別協力者					
田谷 勲	穴戸 正夫	城野 政勝	石川愛石会	矢吹 広実	二瓶 重隆
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃